

2021年1月4日

課程博士 論文審査報告書

主査	建築学専攻	教授	木下 庸子
副査	建築学専攻	教授	山下てつろう
副査	建築学専攻	教授	大内田史郎
副査	総合研究所	教授	後藤 治
副査			藤森 照信
			(工学院大学非常勤特任教授、東京大学名誉教授)
副査			定行まり子
			(日本女子大学教授)

学位申請者：深石 圭子

論文題目： 建築家・中原暢子の生涯における主要な作品と設計思想に関する研究

本学位申請論文については、2020年9月24日の建築学専攻大学院委員会にて内審査開始が承認され審査が進められた(主査：木下、副査：山下、大内田)。審査結果を受けて、同年11月12日に同専攻大学院委員会にて、内審査に合格したことが報告され、承認された。これを受けて同年11月30日の大学院専攻長会議および(全学)大学院委員会にて、内審査結果と、本審査を開始することが承認された。本審査は内審査の審査委員に3名の審査委員を加えて(副査：後藤治、藤森照信、定行まり子)、2020年12月28日14:00～、工学院大学A-1161教室と、コロナ禍での対応として遠隔会議システムを併用して開催された。聴講者は、大学研究者をはじめ、設計事務所、学生など総勢18人の参加があった。申請者による約1時間の発表とその後の質疑を含め、合計約2時間に渡る公開審査を経て、下記のとおり合格と判定されたので、その審査結果について以下に報告する。

本申請論文は、建築家中原暢子(1929年生まれ、没2008年)という、44年にわたって住宅を中心とした設計活動を行い、その社会貢献活動から戦後の女流建築家の草分けとして名前は十分に知られながらも、建築雑誌の掲載作品が少なく、また本格的な作品集も発刊されていないために、我が国の建築史における評価が定まっていない建築家を対象としている。本申請者は、中原が手掛けた144作品の設計図書2,922枚を丹念に読み解くことで、中原の設計作品とその活動を分析、評価し、中原の設計思想の展開過程を明らかにするとともに、設計者中原暢子を日本の建築史に位置付けることを目指した。

論文は7章と、総括の計8章から構成されている。

第1章の序論では、中原の経歴と設計教育、及び影響を受けた建築家について述べられている。また、自身の事務所である「設計同人」を設立し、設計を通して築いた中原自身の思想の展開を、大きく4つの時期に区分して俯瞰的に論じている。

第2章～7章では、中原の作品のなかで特徴的なものを取り上げ、それらを「構造表現主義」、「農村住宅」、「和風住宅」、「茶室」という観点から調査、分析している。

第2章と3章では、「構造表現主義」的観点から作品を論じている。

第2章では、「長覚院」という寺の設計において、当時の技術の先端である鉄筋コンクリートのHPシェル構造形式を採用することで、寺院の伝統と先端技術とを融合させた作品の分析を行い、第3章では「辻別邸」と呼ばれる、丸太材のトラスで組まれた大胆な木構造とブロック造の混構造の住宅建築の分析を行っている。

第4章は「農村住宅」を取り上げ、中原が設計した新築農村住宅10軒の設計図書から、高度成長期の大都市近郊の農村住宅設計について論じている。近代的なダイニング・キッチン形式を取り入れるなかで、農作業と家事、食事が可能な土間空間の採用など、農家の要望を尊重し、現実的な農村住宅としてまとめている事実を明らかにしている。

第5章では、中原が唯一手掛けた様式建築、「水野レストラン」を取り上げ、明治建築風と、蔵造り、書院造りの3種の建築様式を併用した商業建築の設計における中原の思想について考察している。そして、中原の建て主の考えを尊重する設計姿勢について論じている。

第6章では、中原が設計した「和風住宅」の特徴について述べている。新築住宅72作品を、時代区分に応じた「和」の要素の出現とともに統計的に分析し、その後晩年期の茶室設計へと展開されていく過程について述べている。

第7章では中原が生涯を通して設計した25の「茶室」の設計についてまとめている。茶室の設計のみならず、中原自らもお茶の師匠として多くの弟子を育て、茶人でもあり、設計者でもあった中原について論じている。

第8章は本研究の総括と結論をまとめている。

本研究は、中原暢子という、作家論としてのまとまった研究対象になってこなかった建築家の業績について、一次資料を丹念に読み解くことにより、我が国の戦後建築の展開、発展へ果たした貢献を明らかにしている。希少価値の高い論文であり、日本近現代建築史へ、新たな重要な知見を加えるものである。以上のことから、本論文は、博士（建築学）の学位研究論文として充分価値があると評価でき、合格と判断できる。